

## 悪性リンパ腫の治療方針

～介護を必要とする悪性リンパ腫患者の治療に関するアンケート調査中間報告

埼玉医科大学病院 血液内科 照井康仁

びまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫 (DLBCL) は悪性リンパ腫の中で一番多いタイプで、標準的一次治療は R-CHOP 療法であるが、治療の減量や中止は年齢や一般状態 (Performance Status) を参考にしているのが現状である。潜在的に薬物療法のみで治癒可能な DLBCL に絞り、その治療を担当する診療科・センターが介護度に応じてどのような治療を実施する可能性があるかをアンケート調査することにし、介護度とその脆弱性の程度に応じた治療方針を回答いただくことにした。アンケート内容は、介護度別に DLBCL の限局期 (I, II 期) 及び進行期 (III, IV 期) の治療介入の有無、治療選択、選択理由、年齢区分、平均余命区分とした。456 施設中 102 施設からの回答 (22.4%) をもとに統計解析前の中間結果として、「介護非該当」、「要支援 1」、「要支援 2」、「要介護 1」、「要介護 2」では、「治療をする」傾向であったが、「減量する」傾向であった。また、「要介護 3」、「要介護 4」、「要介護 5」では、「治療をしない」傾向であったが、治療をする場合は減量又は緩和的治療が選ばれていた。各施設の介護度への理解は中程度が最も多く、高齢者 DLBCL の治療方針を決定する上での介護度は「参

考にする」・「ある程度参考にする」が 95%を占めた。介護度や社会的要因などの総合的な観点から治療方針を決定している様である。今後、アンケートの統計学的解析からの詳細な結果が待たれる。